

園からの便り  
ひぐらし

8

2017/AUG  
誠美保育園

## この夏に…耳をすませば

梅雨に逆戻りしたような長雨。子どもたちには、少し欲求不満の夏でしょうか。

保育・教育界では、様々な研修が開催されていく季節でもあります。中でも、少し視野を広げて考えてみるような、少し掘り下げてみるような、すぐに答えが出せないような…そんな講座、講義、セミナーなども増えるような気がします。じつと思いを巡らすには、この長雨も悪くない…とまでは思わないのですが、なぜか今年は、ことさら印象的な「言葉」を私の中に残している…夏であります。

「もし今日が人生最後の日だったとしたら、今日しようとしていることを、私はしたいだろうか？」

某多国籍企業創設者の有名なスピーチの一説ですが、この夏のある講演での引用を改めて聴きながら、「したい」という言葉を「すべきこと」に置き換えて自問した言葉でした。どうして人は、こんなシンプルな考え方で、ためらうことな

く行動ができないのでしょうか。そして、「今日しようとしていることを、子どもたちはしたい(すべき)だろうか？」とさらに自問は続くのです。

「私たちは皆、自分で選んでここに来たの。偶然じゃない。運命なんかでもない。君が今まで選んできた選択と、私が今までしてきた選択が私たちを会わせたの。私たちは自分の意思で出会ったんだよ。」

この夏に見た映画の中で、主人公が語っていたセリフ。こんな風に考えると、巻き起こる毎日の出来事に、誠実に向き合えるのかも…そう思いませんか？

「自分は大人なんだ、という思いで行動するのが子ども。ただ、大人から与えられたものを、まだうまく使いこなせないのだけれど、それでも、それぞれの年齢の中のマックスで…大人。」

著名な脚本家の言葉(一言一句、この通りではなかったかも。こうした人の話が聞けるのも、夏ならでは)。

10歳の小学生たちの学校生活を、ただで演じる舞台作品を作るにあたり、実際の小学校生活を見学した際に感じたこと…なのだそうですが…この感性と脚本家ならではの表現力に脱帽しました。

「大人から与えられたもの」というのは、大人側の期待やそれに応えるための技術、そして大人によって作られた今の状況や社会環境などを指すのだと、私は思いました。与えられた状況に、与えられたもの自分なりに駆使しても、まだうまく立ち回れないけれど、それぞれの育ちの中で獲得した「経験や能力」の範囲の中で、精一杯大人であろうとしている…そんな子ども観なのだと思うのです。

これは、「遊び」にも、顕著に現れる姿です。お父さんやお母さん、運転手、お姫様、正義のヒーローなど、ごっこの中の子どもたちは、自分の憧れ、理想の姿を演じようとしています。現実の世界の自分とは打って変わって、ごっこの世界では、「ですます」を使ってルールを説き、極めて道徳的に行動しようとしています。ちよつと背伸びをし、精一杯、社会的な期待に応え

ようとする姿が、そこにはあるように思えます。

それにしても、子どもと大人の境界は、一体どこにあるのでしょうか。その時々自分の力の範囲の中で、精一杯大人であろうとする姿は、幾つになっても終わりが無いことのような気がします。年齢を重ねることが、たまたま「親」になったことが、イコール「大人」であることでもなく…「よき大人とは？」と問い直しながら、少し、背伸びを続けること…子どもたちに、見習わなければいけませんね。

「モノが欲しいのではない。『遊び』が欲しいだけ。」

カレンダー	
8月	3 (木) 乳児健診
	8 (火) 発育測定 (O12)
	9 (水) 発育測定 (K)
	15 (火) 防災訓練
	30 (水) 誕生会 引き取り訓練

これは、あるおもちゃ研究家の言葉でした。他の子が遊んでいるおもちゃを、せっかく奪い取ったのに、早々にそれを放って別の遊びへ…1・2歳くらいの子どもたちによく見られる光景です。

つまり、楽しそうな様子に魅かれて、その「楽しさ」を奪い、手に入れたつもりが、おもちゃ自体に「楽しさ」がある訳ではなかった…ということなのです。そこで、「楽しさとは何か」の体験をサポートしていく大人の存在が重要になってくる、ということなのです。

さてみなさん、本当に欲しいものは…今その手の中に…あるものですか。

園長 折井誠司

※夏の「言葉」たちの主は…園長まで。

- 編集 誠美保育園
- 発行人 折井 誠司
- 印刷所 誠美保育園
- 発行所 社会福祉法人 誠美福祉会

〒192-0364 東京都八王子市南大沢5-1-2

電話 042-675-1551

ファックス 042-677-5643

Email: seibi@nokken.jp

http://nokken.jp/